

定期テストと入試問題

模試会社の情報によると、今春の公立高校入試では、ある高校において内申点 32 の受験生が合格する一方で、内申点 43 の受験生が不合格になる現象が起こったそうです。入試での内申点が相対評価から絶対評価に変わったり、当日点重視か内申点重視かという選択を高校が独自に選べるようになったりした、制度変更の初年度の混乱と言えますが、受験した本人にとっては衝撃的な結果であったでしょう。

この逆転を起こすには、この高校が当日点重視としても 100 点満点の当日のテストで 15 点以上の差（例えば内申 32 の生徒が 90 点、内申 43 の生徒が 75 点）があったこととなります。当日点からみてこれほど実力の差のある生徒が、なぜ内申点で 11 もの逆の評価を受けることになったのでしょうか。

おそらくこの 2 人は異なる中学校の生徒と思いますが、「出身中学の差」という理由は本来「相対評価」の持っているものであり、「絶対評価」の基準が全県で統一されていれば、地域差や中学校差は縮小されるべきものなのです。

内申点には、各中学ごとで実施される定期テストの結果が大きく影響します。ですからその定期テストを簡単な問題ばかりにすれば、高得点者が増えて「4」や「5」を取る生徒の数も増えるでしょう。成績がよくなるわけですから、生徒も保護者も文句を言わないかもしれませんが、残念ながら定期テストの「低いハードル」しか飛ぶ練習をしていない生徒にとっては、ここ 1、2 年難しくなってきた公立高校の入試問題の「高いハードル」を越すことは容易ではないのです。おそらくこれが前述の逆転の一要因と考えられます。

ところで、定期テストはなぜ簡単になっているのでしょうか。原因は 2 つあると思います。ひとつは指導内容削減により思考力を問う設問が出しにくくなっていること。もうひとつは定期テストに対して全く（ほとんど）勉強しない生徒の増加です。特に後者については、先生方もプレテストを行ったり、出題範囲を非常に狭くしたり（「このプリントから 90 点分だす」とか）、何とか勉強させようと苦心されていますが、本人がその気にならなければ結局効果がありません。むしろそのために本来まじめなできる生徒たちも、「これだけでいいんだ」と思い、自分の力をさらに高める目標を失うことになってしまいます。

しかしだからといって定期テストをただ難しくすればよいというものではありません。生徒の実力を正しく評価するためのよい試験問題を作成することは非常に難しいのです。私が考える理想の試験問題は、まじめに勉強している生徒で 60~70 点くらいとれる内容で、20 点分は相当の力がないとできない設問。特に基本的に 100 点満点は取れない問題を 1 問だけ入れておく。その一方で、30 点を下回らないように基本問題を入れておくことも大切です。もしこれを下回れば「1」をつけること（本来なら落第・留年）も辞さない覚悟も必要でしょう。おそらくこれで平均点が 50 点台くらいになるのでしょうか。

今月から各中学の定期テストが始まります。学校はこうした公立入試の変化にどう対応するのでしょうか。